

児童の交通安全教育を通して学校安全を考える-人形をモデルにした道路横断行動の観察学習-

著者	小川 和久
雑誌名	EOS
巻	25
号	1
ページ	115-120
発行年	2012-11-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1241/00000153/



児童の交通安全教育を通して学校安全を考える ー 人形をモデルにした道路横断行動の観察学習 ー

プロジェクト代表者：小 川 和 久¹⁾

プロジェクト参加者：太 田 博 雄²⁾・菊 池 輝³⁾・佐 藤 三 之⁴⁾
片 山 文 雄⁵⁾・中 島 夏 子⁶⁾

プロジェクト連携先：仙台市東四郎丸児童館

Realizing the School Safety through Road Safety Education for Children: Observational Learning of Road Crossing Behavior Using a Puppet Performance as a Model

Abstract

It has become more important to provide school children with safety education in terms of school safety after Tohoku Region Pacific Coast Earthquake. This study aimed at developing a training method of road safety for the purpose of not having any children victims of accidents as well as disasters. We applied a modeling method to the improvement of children's skills of crossing a road. In the training, children were asked to observe and imitate a puppet performance as a model of road crossing doing such as stopping, looking, and raising a hand. It was found that the modeling of a puppet performance was one of the effective methods to raise young children's skills for road safety. Future issues were discussed in light of spreading the training method among other elementary schools.

1. 問題と目的

子どもたちの命に関わる学校安全の問題は、地震、津波、洪水などの自然災害から身を守る「災害安全」、日々の生活上での事件・事故への関わりを防ぐ「生活安全（防犯を含む）」、交通事故を防止し被害者にも加害者にもならない「交通安全」の三領域から構成されている[1]。

東日本大震災では多くの子どもたちの命が失われ、私たちは深い悲しみを経験している。一方でこの惨禍の中、救われた命も多々あり、生きることの大切さは言うまでもなく、自らの力で生きぬいていくための能力を育む教育がいかに重要であるかを、私たちは強く認識するに至った。にもかかわらず、震災後の交通事故で尊い命が失われることがあるとすれば、それは耐えがたいことである。交通事故は一般に人災と言われており、事故の多く

1) 東北工業大学 共通教育センター 教授 Professor, Center for General Education

2) 東北工業大学 ライフデザイン学部 教授 Professor, Faculty of Life Design

3) 東北工業大学 工学部 准教授 Associate Professor, Faculty of Engineering

4) 東北工業大学 共通教育センター 教授 Professor, Center for General Education

5) 東北工業大学 共通教育センター 准教授 Associate Professor, Center for General Education

6) 東北工業大学 共通教育センター 講師 Lecturer, Center for General Education

が些細な不注意等のヒューマンエラーによって引き起こされている。道路交通に参加する者一人ひとりが安全行動の実行に努めるならば、事故に関与するリスクは大幅に減少するものと考ええる。

震災後の学校安全は、以前よりも増してその重要性が指摘されている。災害安全は言うまでもなく、交通事故という二次災害防止の観点に立つならば、交通安全も軽視することはできない。学校安全の三領域はいずれも不可欠であり、互いに連動し補完関係にある。災害安全に加え、生活安全、交通安全においても、安全教育をより一層充実化していく必要がある。

本プロジェクトでは、二次災害防止の観点から、新たな交通安全教育の手法を開発することを目的とする。実際に、児童を対象に教育プログラムを実施することで、プログラムの有効性を検証することとした。

以下、開発した教育プログラムの具体的な内容を紹介するとともに、児童を対象に実施した教育活動の詳細を報告することとする。

2. 教育プログラムの作成

2.1 人形劇のシナリオ

児童を対象とした交通安全教育に関しては、校区の危険箇所を印した交通安全マップを作成するプログラム [2]、高学年の児童が低学年の児童を指導しながら、ともに適切な道路横断行動を学習するプログラム [3] などが最近開発されている。

近年の交通安全教育は、実践的スキルの育成に重点が置かれつつある。抽象的な知識の学習や漠然とした意識の向上は、必ずしも安全行動の実行に結びつくとは限らない。むしろ、交通の実際場面で実践できる行動スキルを学習することの方が重要であり、本プロジェクトにおいても、テーマを道路横断に絞り、実践的なスキルを学ぶ教育内容にすることにした。

具体的には、人形劇の手法を用いて、小学低学年から中学年の児童を対象に、道路横断行動の基本「止まる」「確かめる」「手をあげる」を学習する。この年代の子どもたちの課題は、交通環境に適応するための基本行動がまだ十分に形成されていないことにある。衝動的な行動を抑制する力が弱い、交通環境を認知するための知識構造が不十分、死角など目に見えない危険に対する感受性が低いなど、適応のための交通行動がまだしっかりと形成されていない。こうした発達的な課題を考慮した上で、横断時の基本行動の形成が促進されるためのシナリオを作成した。

子どもたちが抵抗感なく人形劇を受容し、そのことにより、効果的な学習の場になることを目指した。シナリオを構成するにあたっては、次の4点を基軸にして場面展開や具体的な台詞を創作していった。

(1) 震災後の重苦しい環境の中での学習であることから、楽しく学べる人形劇にする

観ている者が楽しく学べることを第一に考え、愛嬌のあるクチパク人形を使用することにした。また、クリスマス行事に関連づけて面白いストーリー展開になるように物語のシナリオを構成した。

(2) 子どもたちが日頃利用する公園と横断歩道を、劇中の場面にする

交通安全を身近な問題として理解してもらうためには、人形劇の舞台となる場所が、子どもたちと関わりが深いものである必要がある。児童館に隣接する公園と、その直近の横断歩道(図1)は、児童館へ遊びに来る子どもの多くが利用する場所であり、ここを舞台にすることで、登場人物の姿が同一視され、物語が自分の問題として意識されるものと仮定した。

（３）登場人物の会話や演技を通して、飛び出しの危険性と安全な道路横断の方法を解説する
人形劇の演題を「安全にわたろうね」とし、何を学ぶのか、学習目標を明確にした。子どもたちに伝えるテーマは、道路横断時の危険性と安全な横断方法であり、その内容をできるだけ単純明快になるように人形劇の中で表現した。

（４）人形をモデルに、「止まる」「確かめる」「手をあげる」の行動を観察学習する

抽象的な知識学習に留まらず、具体的な行動スキルを習得するため、子どもたち自身も身体を動かして劇に参加し、「止まる」「確かめる」「手をあげる」動作を練習する。このとき、人形の動作を手本にして模倣する「観察学習（モデリング）」の原理を応用することにした。



図１ 劇中の舞台
（手前の横断歩道と、その奥にある公園が人形劇の舞台となる）

2.2 人形劇の概要

登場人物は、主人公の二人（男の子と女の子）、主人公の母親、老人の４名である。これら登場人物の会話と演技で人形劇が進行するが、要所々々で司会者のナレーションが挿入され、状況説明と場面展開が行われる。

人形劇は主に４つの場面から構成されている。児童の集中力が持続することを考慮し、鑑賞時間が１０分程度に収まるようにシナリオを構成した。

表１に各場面での概要を示す。遊びに夢中になっている子どもたちが道路に飛び出して、あわや事故になりそうな場面から物語が始まる。その様子を見かねた老人が子どもたちを注意するが、本人たちは聞く耳を持たない。再度、飛び出しの場面があり、子どもたちは危険な目に遭う。今度は、老人の忠告を素直に聞き入れ、横断行動を練習するという展開になる。このとき、観察学習の原理が応用され、老人が手本となる横断行動を提示するとともに、鑑賞している児童も一緒に参加して、「止まる」「確かめる」「手をあげる」の行動を模倣していく。一方向の人形劇ではなく、参加型の人形劇とすることに本プログラムの特長がある。

物語の最後では、主人公の二人は模範となる横断行動を披露する。学べばできるようになることを、鑑賞している児童にメッセージとして伝える。そして、謎の登場人物であった老人は、実はサンタクロースであったという意外な結末で締めくくり、クリスマス行事との関連性を意識させたところで物語が終了する。

表1 人形劇の各場面での概要

場面	人形劇の風景	概要
1		主人公の男の子と女の子が、児童館の隣にある公園へ遊びに来る。公園は道路を挟んだ反対側にあるが、子どもたちは、止まることもなく、左右を確認することもなく、一目散で道路を走って横断する。彼らの後ろを車が猛スピードで通り過ぎるが、本人たちは気づかない。その様子を近くで見ていた老人が思わず「危ない」と叫び、子どもたちを呼び止め注意する。しかし、二人は人ごとであるかのように、老人の忠告を上の方で聞いている。
2		主人公の二人は、公園でサッカーボール遊びに夢中になる。互いにボールを蹴り合っているが、その内大きく蹴ったボールが、道路へ転がっていく。そのボールを追いかけて、二人は道路へ飛び出す。そのとき、近づいてきた車とあわやぶつかりそうになる。近くで目撃していた先ほどの老人が、すんでの所で車を停止させ、子どもたちを助ける。その後、子どもたちに正しい道路横断の仕方を指導する。今度は、子どもたちも素直に老人の助言を聞き入れ、一緒に道路横断の方法を学ぼうとする。
3		老人が道路横断の手本を見せて、主人公の二人がそれを模倣する。会場で観ている児童もいっしょに参加するようにと司会者が呼びかける。老人が示す「止まる」「右、左、右を確かめる」「手をあげる」の一連の動作を観察した後、会場の児童もいっしょにその動作を模倣する。これが観察学習の場面となる。この観察学習の動作は2回繰り返される。
4		主人公の母親が公園へ二人を迎えに来て、道路反対側から子どもたちを呼ぶ。今度は、二人は飛び出さずに、「止まって、右、左、右、手を上げて…」と、先ほど学んだ安全な道路横断の仕方を披露する。観ている児童に模範行動を示すことで、学べばできるようになるということをメッセージとして伝える。二人がきちんと道路を横断するのを見届けた老人は、「では仕事に戻ろうか」とつぶやく。その後、サンタクロース姿に変身し、そりに乗って夜空に去って行く。

3. 方法

3.1 対象者

仙台市東四郎丸児童館の協力を得て、周辺地域に住む小学1～4年生の児童約50名を対象に教育を実施した。児童館のイベント「クリスマス会」に参加した児童が人形劇を鑑賞することとなった。

3.2 周辺地域の交通環境

児童館が立地する地域は被災地域と隣接する。バス以外の公共交通機関がなく、移動手段として車が利用されることが多い。児童館を取り囲む道路は、片側一車線の道路で、両側に歩道が整備され比較的幅員が広い。混雑するほどの交通量はなく、どちらかと言えば車にとって走行しやすい道路である。そのためか、走行車両のスピードが比較的速い。一方、児童館近くの交差点および横断歩道には信号等の安全設備がなく、横断する際には「止

まる」「見る」など、自分の安全を自分で守る行動が実行されないと、道路横断が非常に危険なものになってしまう。

3.3 実施日

教育を実施した日は、2011年12月24日。実施場所は児童館内にある遊戯室であった。児童館のイベント「クリスマス会」のプログラムの一つに人形劇を含め、交通安全を学ぶ機会を提供することにした。「安全にわたろうね」と題して人形劇を実演。人形劇に要した時間は約10分であるが、ステージの準備、挨拶、スタッフの紹介等の時間も含め、全体で約20～25分の時間が必要となった。

3.4 舞台装置

遊戯室の演台に簡便なステージを設置。背面のスクリーンにパワーポイントのスライドで情景を切り換えて投影し、劇中の舞台となる公園や横断歩道を表現した。ステージ前面には高さ1m程度の幕を張り、幕と背面スクリーンとの間の空間を利用して人形を操った。前面の幕、人形、背面スクリーンの順に、奥行が感じられる空間を作り、人形の動きが立体的になるように工夫した（表1の写真を参照）。

3.5 スタッフ

人形劇の実演および小道具等の準備については、ボランティアとして参加した本学学生が主体となり、一連の作業を担当した。登場人物（男の子、女の子、母親、老人）の人形を操る者4名、小道具（車、サッカーボール）を操る者1名、司会者1名、ノートパソコン（スライド提示）を操作する者1名、計7名のスタッフがそれぞれの役割を担当した。

4. 子どもたちの反応

全体的に子どもたちの反応は積極的なものであり、興味深く人形劇を鑑賞している姿が見受けられた。観察学習の場面においては、人形の模範行動の通り、左右の確認と手を上げる動作を素直に模倣している様子が観察された。通常、校庭で訓練する際は、教師や保護者がモデルとなるが、室内で人形の動きをモデルにしたとしても、観察学習が成立することが示されたと言える。

しかし、問題点もいくつか見出された。観察学習の場面に入る際、それまで座ったまま劇を見入っていた児童は、すぐに立ち上がることができず、観察学習の体勢を整えるのにやや手間取ることとなった。自分たちも身体を動かして、道路横断を練習するということが予期されていなかったことが戸惑いの原因だったと推察する。この点については、劇に参加する場面があることを、予め上演開始前にアナウンスすることで改善するのではないかと考える。

確認行動の観察学習において、「右、左、右」の順序で顔を動かす動作を人形が示すが、それを模倣する際、「左、右、左」と左右を逆転させて顔を動かした児童が数名いた。発達的に、年少の児童が理解する左右の概念はまだ曖昧である。観察学習の際に留意すべき点であったことから、私たちは、人形と児童を対面させてモデリングするのではなく、人形の顔を後ろ向きにして、児童の顔の向きと同じ方向にすることで対応しようとしていた。しかし、実際には、それでも左右の順序が逆転した児童がいたことから、もう少し丁寧な指導方法が必要であったと言え、今後、左右の問題についてプログラムを改善していきたいと考えている。

5. 今後の展望

プログラムにはまだ若干の調整や改善の余地があるものの、全体的に人形劇によるモデリングが実施可能であることが今回示された。以下、この教育手法を普及するための課題について議論したい。

今回の人形劇のシナリオは、他の小学校区でも実施できるように、台詞や写真の一部を修正するだけで、学校や地域の特色を反映させることができる。たとえば、劇中の舞台は、児童館に隣接する公園と横断歩道であったが、他地域で実施する場合は、その地域で子どもたちが頻繁に利用する箇所を舞台にすればよい。スライドの写真を入れ替えるだけで柔軟に対応できる。また、今回はクリスマスのシーズンであったため、老人をサンタクロース役にして登場させたが、七夕伝説や竹取物語などの登場人物に置き換えても、ストーリー展開は同じものになる。台詞の一部を変更するのみで対応可能である。このように地域性や実施時期に応じて、様々なシリーズを作ることが可能であり、今回のシナリオはそのための基本形として位置づけられる。

教育効果を考えると、現行の交通安全教育（例えば、校庭での模擬道路を使った訓練）と人形劇を組み合わせた教育プログラムも有効であろう。室内で左右確認のモデリングを体験した後、校庭での模擬道路で実践するなど、行動スキルの定着を図るために、既存の教育と連動させて、内容を充実させていく方法が考えられる。

その他、今後、教育を普及するにあたっては、関係機関との連携、スタッフの確保、地域の安全と大学の役割など、検討すべき課題は多々ある。また、学生が主体となる活動は、こうした普及を支える原動力になり得る。今回の取り組みにおいては、学生による貢献が大であった。シナリオ作り、台詞の具体化、小道具の作成、人形の操作など、若い人たちの惜しみない努力によって活動が支えられた。若い人たちならではのアイデアも提案され、それがシナリオや台詞の中に反映され、人形劇をより魅力的なものに作り上げていった。今回のような取り組みは、大学が学校安全に貢献する一つの活動モデルになり得る。そのことを広く情報発信していきたい。

謝 辞

私たちの活動趣旨をご理解いただき、ご助言とご協力を賜った仙台市東四郎丸児童館館長の小岩孝子氏、児童館のスタッフの方々に厚くお礼を申し上げる次第である。先述の通り、人形劇を制作、実施するにあたって、本学学生による貢献は大である。ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科の丸山龍平君、岡崎真由さん、押切真斗君、加藤翔平君、齋藤真衣さん、ボランティア部の田中真斗君に心よりお礼を申し上げたい。

参考文献

- [1] 文部科学省 2010 「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育
- [2] 小川和久 2007 児童を対象とした交通安全教育プログラム「危険箇所マップづくり」の評価研究 IATSS Review, Vol.32, No.4, 299-308.
- [3] 大谷亮・橋本博・小林隆・岡田和未・岡野玲子 2011 高学年児童を対象にした交通安全教育 ―役割演技法を用いることによる主体的な学習の可能性について― 安全教育学研究, Vol.11, No.1, 7-24.